

## 特集

## 「個」をつなぎとめる運動へ

——提案軸に新たな地平を——

高 士 薫

## 「部落解放運動には夢がある」

大阪府連執行委員会の提案は、こうタイトルにうたいあげた。いい表現だと思う。だからこそ私なども、解放運動のまさに外縁で、時折、運動と交錯しながら仕事を続けてこられたのだし、現場で活動を続ける同盟の方々も、あるいは非同盟員でありながら集う多くの市民、研究者たちも、ほぼ例外なくその「夢」を共有しているのだと思う。

提案を何度か読み返した。「待っていたものがやっと出てきた」といううれしさがあった。同感だ、同感だ、と思いつつ読んでいた。しかし、うれしさと同時に、「これが

あと一〇年早く出ていたら」と、苦い思いが付きまとったことも偽らずに記しておこう。結論だけを先にいうなら、この提案をいかに早く実現できるか、提案がいう方向で新たな運動のスタイルをつかみ取り、新たな組織へといかに早く脱皮していけるかが、きつと勝負どころなのだと思う。

「もつとも警戒すべきことは、これまでに成功した方針をそのまま推し進めていけば、これからも発展できるという発想です。変革のスピードは急速です。そのスピードに遅れることなく改革を実行していく必要がある」と提案は訴える。まさにその通りなのだ。しかし、どんな組織であれ、構成員に染み付いた習性がある、先例主義もある。そして、地域による大きな意識差がある。

都市型の発想に基盤を置いた大阪府連の提案を、解放同盟が組織をあげて、しかも速やかに生かしきれるかどうか。決して容易な道ではないだろうと、摂津、播磨、但馬、丹波、淡路の「五つの国」に分かれているといわれる兵庫にいる私などは考えてしまう。

だが、やるしかない。解放同盟が前進しなければ、日本の人権文化の開花はそれだけ遅れるのだし、市民社会から見放された同盟には衰退の方向しかないことも、提案がいう通りなのだから。

提案に触発されて、かねて考えていたことをいくつか述べさせていたきたい。

まず、提案がかなりの字数を費やした「まちづくり」に触れよう。阪神・淡路大震災からの地域の復興は、提案が指摘したように都市計画の貧困さに邪魔をされ、制約を受けた。しかしその制約の中ではあっても、住民主体のまちづくりに、いくつものモデルケースを提示し得たと思っている。部落問題との関連でいえば、神戸市長田区の番町地区のまちづくりに注目したい。運動体がまちづくり協議会の主要な構成員となり、長年の運動で培ったパワーとノウハウを震災復興に生かした経験から、ぜひ教訓を学び取りたいと思う。

それでも、一部の例外を除き、基本的に超えられな

った壁は改良地区の線引きだった。神戸市は八〇年代末、旧市街地の空洞化問題、いわゆるインナーシティー問題を市政の重要課題にすえた。番町地区は当時から、周辺地区に比べて人口減が激しく、高齢化が極端に進み、地域の活力は失われつつあった。インナー問題という社会矛盾を凝縮したのが番町地区だった。にもかかわらずこの町は、市が描く総合的なインナー対策には登場せず、あくまで同和対策として別枠の位置付けを受けた。

別枠ならばこそ、震災に際して復旧だけは円滑に進んだ側面もある。しかし周辺地区を含め、一帯をどういう町にしていくのか。そのビジョンは今も明確に描けてはいない。

西宮市の芦原地区も似た状況にある。JR駅の直近という恵まれた立地を、将来、どう生かすのか。議論がないわけではない。しかし現実の施策は、線引きの内と外で二分され、総合的なまちづくりの青写真は、今も描けないでいるように見える。

周辺地区を含めた一体的なまちづくり。それを可能にするのはやはり、部落解放運動の新たな前進だろうと思う。第三期の解放運動に期待するゆえんでもある。

第二に、行政との関係だ。大阪と違い兵庫は、特に県行政と長く対立もしくは緊張関係にあった。行政にとつ

て運動体は、要求団体の一つ、それも、慎重を期して対応すべき団体だと、きつと映っているのではないか。「行政闘争」を軸にすえた従来の運動スタイルが、必然的にこうした認識を招いたともいえる。

そして行政は行政で、それなりの予算を投じ、「人権文化の創造を」とうたっているのである。兵庫県にも人権啓発協会がある。設立に際し、部落解放同盟が反対した経緯はあるものの、ぜひ協働の関係を模索し、同盟も、そして人権啓発協会も、県域における人権センターとしての機能を強めるよう期待したい。

第三は、組織に関することだ。本来、部外者がいふべきことではない。しかし、部落解放同盟という組織と運動はすでに市民の財産だと考え、あえて触れておきたい。

支部活動は、確かに運動の原点であり、生命線だ。これが弱まると運動は停滞し、活力を失っていくことだろうと思う。しかし同時に、流動化が激しいこの時代。生まれ育った地域で生涯を過ごすことは、特に都市においては希有な現象になりつつある。自らそれを選択し、かつ条件がそろわないと、すでに実現できない類いのものだ。だから、地域を離れた人材をしっかりとつなぎとめる組織論。これが欲しい。

次に手探りしたいのは、部落出身ではないが、「人権を

軸とした社会づくり」に「人と人との豊かな関係づくり」に何らかの形で参加したいと思い、部落解放運動に共感を覚える人たちと有効につながる組織論だ。

第三期運動論の提案は、パートナーシップの原則による「課題別市民連帯型共闘」を提唱する。ネットワーク型共闘である。まずはその方向に踏み出したい。しかし、それでもなお十分でないような気がしてならない。

例えば、労組との「部落解放共闘」がある。これが解放運動の裾野を広げた功績は高く評価するが、現実には、双方の幹部間で方針や行動計画をすり合わせ、あとは、互いの動員力に頼っているきらいはないか。解放共闘を積み重ねる中で、個人としても解放運動に学びたい、もっと話がしたいと考える人材が出てきた時、今の組織に受け皿はあるか。

「人権情報発信型の運動システム」「水平的な広がりをもって拡大していくネットワーク型の組織」。提案が示す方向が深まり、しっかりと市民個人々々をつなぎとめていくことを期待したい。

部落解放同盟は、すでに大きな組織を抱えている。その組織を維持し、日々、運営するだけでも、多大な労力、知力があることだろう。その多忙さから、どうか内向きの運動にならないでほしい。

提案は結語で「『よき日』への、使命とロマンに燃えて」と語りかけてくる。

そう、どれだけ理論を深めようと、「燃えているか」「燃えることができるか」―が、実はもつとも重要な試金石であるに違いない。

どうか、運動に携わる人びとが、若者たちが、もつと奮い立ち、燃える運動であってほしい。その熱気を回復してほしい、と願わずにはいられない。第三期運動論の提案はそうした意味で、運動の新たな地平を、「夢」を、指し示してくれている。

# 生と死の先端医療

――

出生前診断・遺伝子治療・臓器移植・安楽死・尊厳死、さらにはヒトゲノム解析・クローン開発など歯止めなき先端医療技術。自己決定の美名で迫られる選択にノーが言えますか。

生命操作を考える市民の会編

A5判、211頁  
2、200円＋税  
解放出版社

